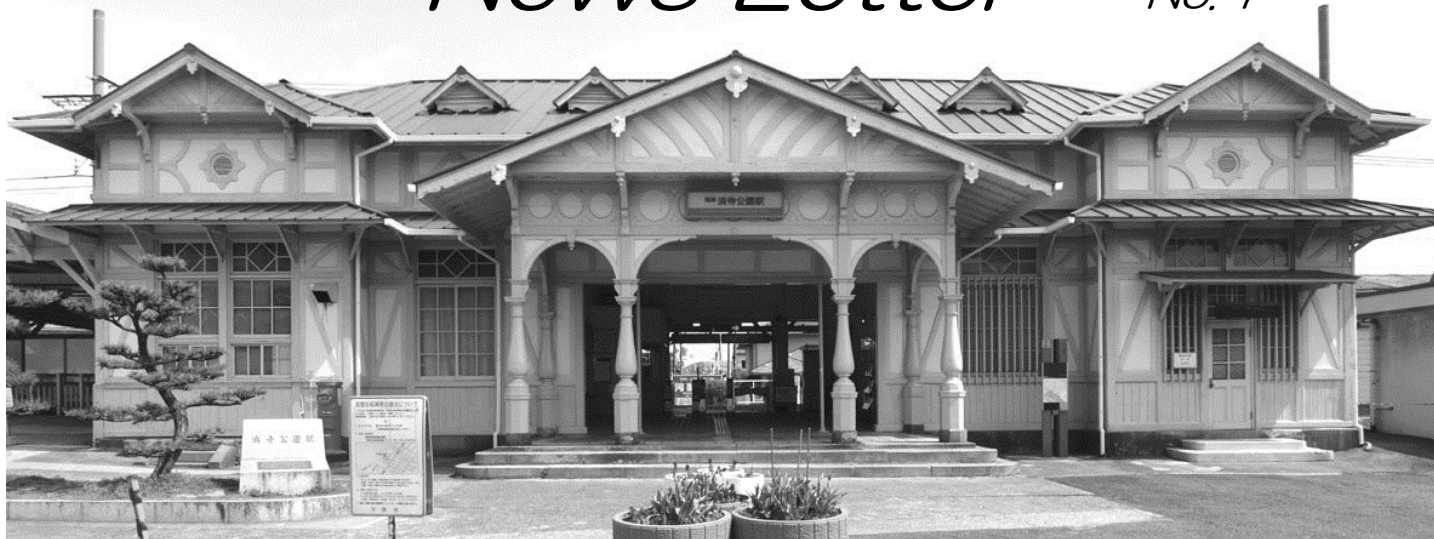


News Letter

No. 7



仮駅舎の完成と旧駅舎の109年の駅務とのお別れ 新しい活用に向けての準備開始

浜寺公園旧駅舎のお別れセレモニー

浜寺公園駅の仮駅舎が予定通り完成して、1月28日の始発からこの駅舎で西側からの改札口業務が行われるようになりました。

これに先立ち、1月27日の午前10時から、駅前で旧駅舎のお別れの式典が執り行われました。式典では、この駅舎業務を統括する泉大津駅長の岡本安善さんのご挨拶、地元代表としてNPO法人浜寺公園駅舎保存活用の会の平山芳弘理事長のご挨拶、浜寺昭和校区自治連合会の飯田月子さんによる駅舎への花束贈呈が行われて、明治40年から109年の長い期間、まちの発展を見守り、支えてくれた素晴らしい駅舎への感謝を込めた行事が執り行われ、関係者の記念写真が駅舎を背景として撮影されました。

浜寺公園駅舎試験活用ワーキンググループ発足

旧駅舎の駅務が終了しましたので、ここからは駅舎の試験活用に向けての準備が始まります。最初のステップは曳家の準備です。駅舎の建物について、曳家を実施するための構造上の強度調査と、曳家に向けての補強計画と治工具の準備などが行われます。また、この段階で将来の保存に対する改造・改修の検討もされます。

これと並行して、約10年間の試験活用の実施計画が立てられます。誰が、どのような手立てで、この建物を維持・管理・活用するのか、そのためにはどのような費用が発生するのかなどを検討します。

差し当たり、試験活用の概略プランの企画が必要になりますので、その準備作業をするワーキンググループが発足しました。この駅舎の試験活用時の条件として、まず、建物の所有者は南海電鉄であり、それを堺市が借用するかたちで運営されます。また、この試験活用事業は連続立体交差事業の一環として実施されますので、諸経費はその事業費用の一部として計上されます。

また、試験活用事業の遂行者は、どのようなかたちの受託になるかは

決まっていませんが、平成20年の懇話会では市民、南海電鉄、堺市がコスト意識を持って、それぞれの役割を果たすかたちでこれに当たるということになっています。

今回のワーキンググループは、堺市の連続立体担当課がまとめ役となり、堺市から連立担当課の他に文化財課、観光企画課、と西区自治推進課、地元代表としてNPO浜寺公園駅舎保存活用の会から5名が参加し、また、コンサルタントとしてアブル総合計画事務所の参加を予定しています。

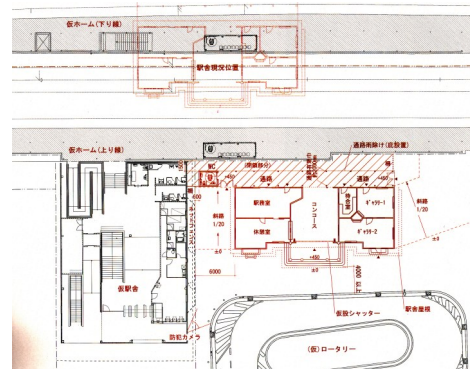
平成27年度には1月から3月にかけて2回か3回の会合を持ち、その結果を集約して、28年度の5月と7月に市民意見交換会を開催して、改修計画と活用母体の決定についての合意形成をすることになっています。

平成28年度の後半から平成29年度の前半にかけて、活用母体を決めて詳細な活用計画を立て、また、駅舎の曳家を行って改修工事を完成させます。現在の予定では、平成29年12月に試験活用を開始できることになっています。

本年1月23日に、第1回目のワーキングを実施して、駅舎の移転先の位置の確認や仮設トイレの設置についての提案の審議を行いました。

その際、現在の駅舎の位置、仮駅の位置、仮移転先の位置、トイレの位置、夜間の通行可能区域の設定、などが提案されました。

仮駅の東には上り線の仮プラットフォームの建設が予定されています。そのプラットフォームの東には2本仮線が建設されて、高架工事の開始に備えることになっています。仮線の完成は平成30年末となっています。



当法人は、登録有形文化財である浜寺公園駅舎の維持管理と活用に関する事業を行い、その活用事業をもって地域住民の交流を図り、周辺地域のまちづくりの寄与することを目的としています。

浜寺公園と駅舎に育てられたハマデラのまち

南海本線の浜寺公園駅の駅舎は、辰野片岡事務所が設計した明治の代表的な木造建築物として知られています。この駅舎は、平成10年には国の登録有形文化財に指定され、さらに平成12年の「鉄道の日」記念行事として選定された近畿の駅百選では、JR大阪駅、阪急梅田駅に続いて三番目に名を連ねています。

「音にきく高師浜」の浜辺に新しいまちが

このあたりの浜辺は、万葉の時代から高師浜と呼ばれて、高野参りの道すがらにここを訪れた都人の詠み歌が、万葉集や古今和歌集に取り上げられています。百人一首の「音にきく高師濱のあだ波は掛けしや袖の濡れもこそすれ」もよく知られた和歌です。明治の初めに行政府が浜辺の松を伐採しようとしているのを、たまたま通りかかった大久保利通が「音に聞く高師濱のはま松も世のあだ波のはがれざりけり」と本歌取りをしてその愚行をいさめた、と伝えられています。

そのこともあって、明治6年に全国で25の公立公園に指定されたときに、この地域の白砂青松の浜辺が浜寺公園となりました。明治30年には難波と堺の間を運行していた阪堺鉄道が南海鉄道となり、尾崎まで開通し、浜寺停車場が開設されました。その頃から、公園内には何軒もの料亭が開業し、公会堂も建てられて賑やかになりました。日露戦争後の明治39年からは、毎夏、海水浴場と水練場が開設され海水浴客も大勢訪れるようになりました。

また、風光明媚であり、さらに浜辺の空気はオゾン豊かで健康に良いことから保養地に適していましたので、公園の周辺には別荘が建ち並び、駅の東側には敷地の広い住宅地が分譲されました。このような地域の発展を見越して、南海鉄道は明治40年に難波、浜寺間の路線を複線電化し、それに合わせて新しい駅舎を建設して、駅名も浜寺公園駅と改称しました。それ以来、浜寺は、東洋一の海水浴場と関西屈指の優良住宅地と素晴らしい駅舎があるまちになりました。

辰野金吾と片岡安の事務所

浜寺公園駅と同じ時期に難波駅も建て替えられましたが、その両方の設計は辰野片岡事務所に依頼されました。

辰野金吾は現在の東大工学部の第1回卒業生で、卒業後に英国に留学し、帰国後は東大で教鞭を執りました。中央銀行の建物、中央停車場、国会議事堂の設計を目指していた辰野は、帝国大学工科大学学長在職中に日銀本店の設計

を手がけ、さらに、明治38年に辰野片岡事務所を大阪に開設し、駅舎の設計に手を染めました。東京の中央停車場を設計したのはその後のことでした。

片岡安は東京帝国大学の辰野の下で建築を学び、卒業後、日銀技師として日銀大阪支店の建設に従事しました。その後、大阪で建築家として活躍しましたが、浜寺公園駅舎の建設の時期には浜寺に在住したことも記録されています。片岡安の岳父片岡直温は財界や政界で活躍した人でした。直温の兄の片岡直輝は日銀の大阪支店長から財界に乗り出し、ガス事業、鉄道事業に参画史、大正6年から大正23年には南海鉄道の社長に就任しています。

浜寺公園駅の設計に、当時の建築界の第一人者であった辰野金吾が携わったのはなぜかという疑問があり、当時高石にあったロシア人捕虜収容所の存在で、海外に誇れる駅舎の建設を辰野に委ねたという意見もありますが、むしろ、辰野金吾の弟子に当たる片岡安と南海鉄道の関係の方が妥当な動きで、辰野片岡事務所が設立されたものと推察されます。

新しい高架駅の建設に向けての第一歩

駅舎が建てられてから100年ほどした平成18年に、南海本線の連続立体交差事業が認可されて、高架路線が建設される事になりました。まちのシンボルだった駅舎のところに仮線が建設されることになり、建物が撤去されそうになりました。しかし、堺市や南海電鉄と学識経験者、地域住民代表などが参加した懇話会などでの協議の結果、古い駅舎は新しい駅の近くに保存されることに決まりました。

今後、駅舎は調査や改築などを行って、平成29年度中に、南西方向に30メートルほど曳家されて、平成36年度頃までその場所で試験活用に供されます。その後、新しい高架駅が完成すると、その駅の玄関口付近に戻されて、未永く保存され、有効に活用されることとなります。昭和30年中頃までは海水浴場として賑わい、その後はプールやバラ園などで親しまれている浜寺公園と周囲の住宅地の様子は、高架構造物の完成で、新しい場に変化します。広い駅前広場が出現し、今までは駅のところで分断されていた東西の交通が自由になることや、駅の高架下にいろいろな施設が造られることなどで、今までとは違ったまちの姿を形作ることが出来ます。まちの人たちが、この駅舎を活用して、そこから次の100年、200年を目指した新しいまちづくりを推進することが期待されています。

特定非営利活動法人 浜寺公園駅舎保存活用の会
堺市西区浜寺昭和町2丁177番5
電話: 072-266-1233

NPO法人で何かやってみたいという会員募集
駅舎を保存活用して、楽しいまちづくりをする会です。駅舎の中でやってみたいことを募集しています。こんなことをやって欲しいと言うご希望も歓迎です。